

# 大名家墓所の一例

——近江膳所藩主本多家の墓所——

藤 井 直 正

一 は し が き

近世、江戸時代は幕藩体制の社会である。それは、天下の統一を完成し、江戸に幕府を開いた徳川家康にはじまる将軍家を頂点とし、将軍家との近親度をもって、親藩・譜代・外様の各大名が領有する藩とによって全国を支配する政治体制であった。

慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原の合戦から三代将軍家光のころまでは、さかんに改易・減封・移封が行なわれ、大名の数は安定しなかったが、以後は次第に安定し、その数は二六〇ないし二七〇家に達したといわれている。明治維新に至るまで、江戸時代二百六十余年間における大名の数は、仮に徳川将軍家十五代を例にとっても、優に数千人を超える数字となる。

こうした、近世における大名家の奥津城としての墓所は、各大名の城下に建立された菩提寺につくられる場合が一般であるが、江戸に所在する然るべき寺院につくられている場合、あるいはある縁故によって、代を限って別の場所につくられる場合、そのほか、高野山奥之院に林立する分骨による造塔例などをふくめると、上記の大名の数はるかにこえる墓所が存在しているのである。

日本三大墓所として有名な、石川県金沢市野田山の前田家墓所、山口県萩市東禅寺境内の毛利家墓所、長崎県対馬厳原町万松院境内の宗家墓所をはじめとして、これら大名家の墓所は、各地方においては、それぞれの地方の歴史を物語る史跡として、地方史・誌に収録・紹介されている。また、そのうちの何箇所かは、文化財保護法による国の史跡として、あるいは都道府県・市町村の文化財保護条例・規則によって史跡に指

大名家墓所の一例

## 大名家墓所の一例

定されているものもある。しかし、全国を見わたした場合、その数が余りにも多いこともあるが、大名家墓所のリストさえつくられていないというのが実情である。

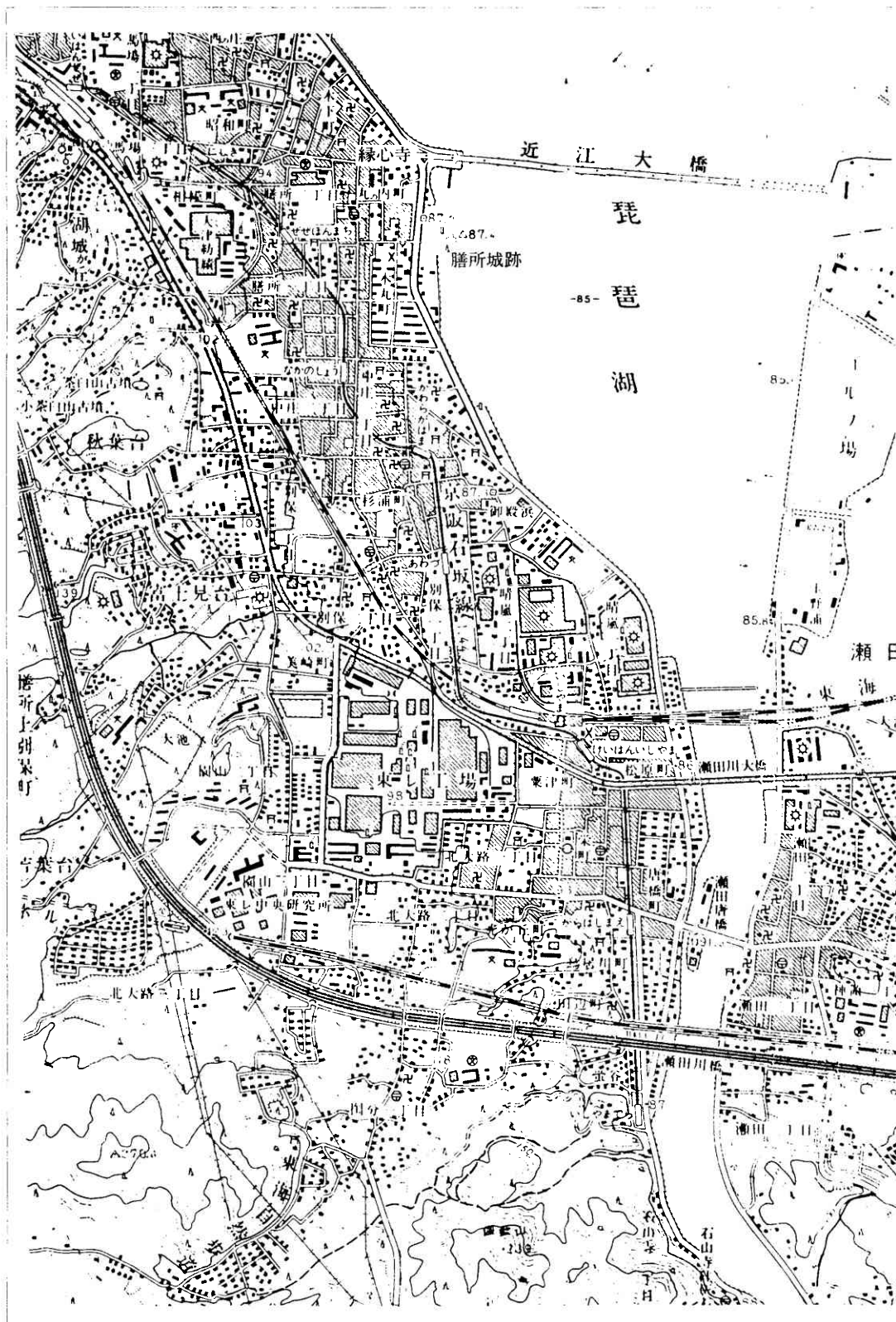
近世という時代をつくり、自らその支配者として君臨した大名の、その栄枯盛衰を物語る遺産としては、全国各地の領国につくられた城館や城下町があり、記録・古文書・生活用具など、さまざまな文化財が数えられ伝えられている。これらを現世における大名のすがたを物語る遺産とするならば、その墓所・墓塔等は次元を越えた来世の遺産ということになる。遺骸・遺骨を納めて死後の菩提を弔い、歴代の治績を追慕する対象として営まれる墓所・墓塔にも、現世における大名家の繁栄と権力の大小をそのまま反映し、所属する宗派によって、また家風によって、さまざまな形態が見られるのである。従って、過去の遺跡・遺物を対象とする考古学が、一つの研究分野として大名家の墓所を取り上げ、あらゆる角度から考察を加えることは、近世考古学としては必須の作業であり課題であると私は考えている。しかしながら、あまりにも対象とする物件が多いためなのか、それとも近世という時代への関心が薄いためなのか、考古学の対象として、大名家の墓所を取り上げた調査・研究は数指を屈するに過ぎない。

本稿では、大手前女子大学史学研究所がテーマとしている、伊勢神戸藩主本多家史料の調査・研究に関連して、その本家筋に当たる近江膳所藩主本多家の菩提寺である滋賀県大津市丸之内町縁心寺に所在する歴代墓所と、その直接の先祖に当たる、愛知県宝飯郡小坂井町伊奈の地にある「お松見」本多家墓所について、私が本学史学科学生の考古学実習として取り上げた両墓所の調査成果を報告すると共に、大名家の墓所について二、三の知見と問題を提起することを目的とした。

## 一一 膳所藩主本多家の墓所

### 1 膳所の地と膳所藩

琵琶湖の西岸に沿ってのびる大津市の南端に近いところに位置する膳所(ぜぜ)の地は、瀬田川の川口に当たり、東海道が通り、瀬田の唐橋の



第1図 膳所城跡と縁心寺の位置 (1/25000,「瀬田」)

## 大名家墓所の一例

西詰を押さえる交通の要衝であった(第1図)。

古くは栗津(あわづ)荘の中心であり、都に琵琶湖で獲れる魚鳥を供進するところで、陪膳(おもも)浜とよばれ、膳所の地名もこれに由来している。

慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の合戦に勝利をおさめた徳川家康は、翌六年(一六〇二)、それまで豊臣秀吉が築いていた大津城を毀ち、豊臣方の拠点大坂と王城の地京都に睨みを効かすことを目的として新しく膳所城を築かせ、湖岸を通じる東海道の北側に大津口、南に勢多(せた)口を設け、その区間に、城下町をつくった。

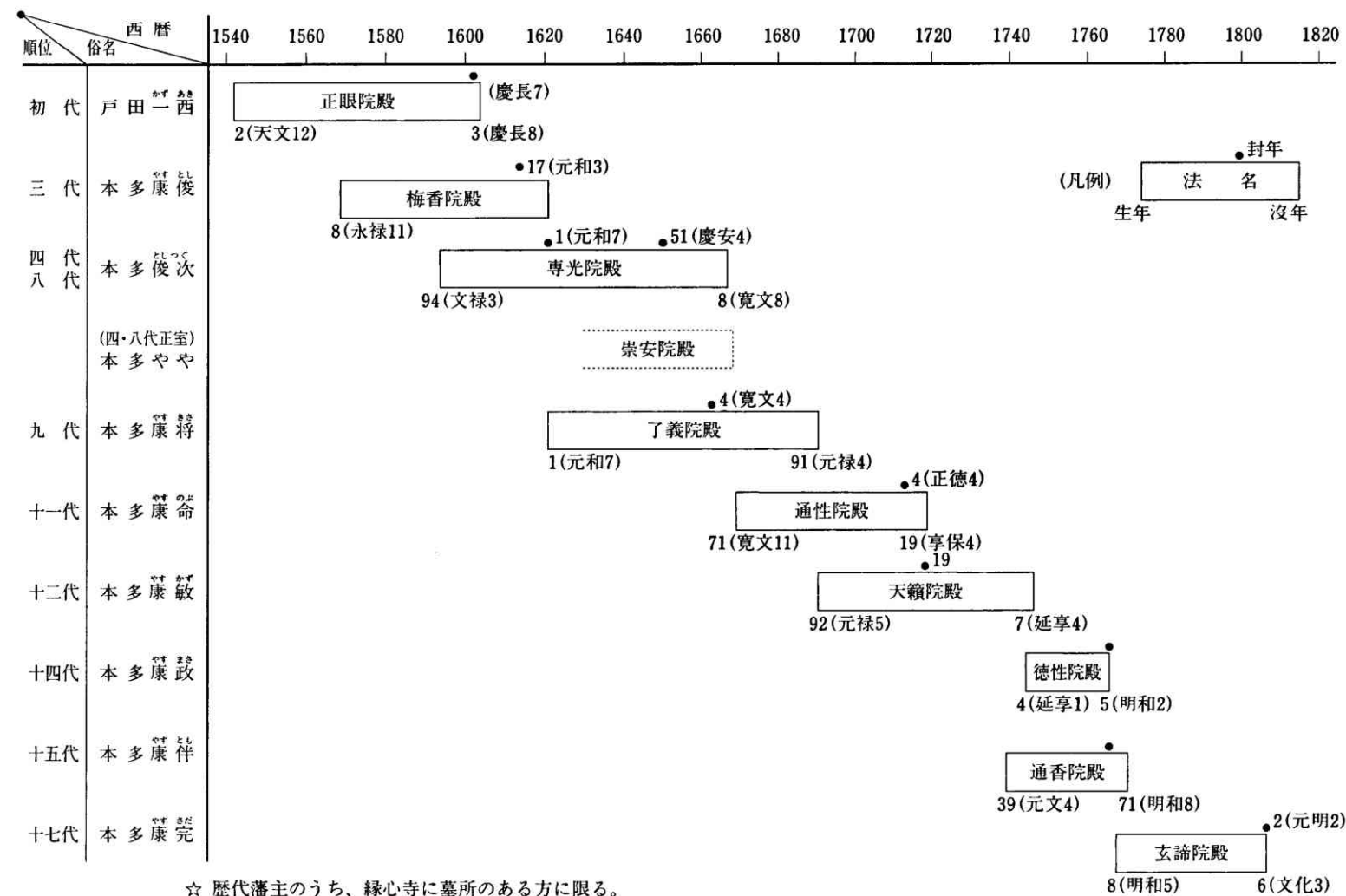
慶長七年(一六〇二)、譜代の戸田一西(かずあき)が初代城主として三万石をもって入城して以来、約五十年の間に城主は戸田氏・本多氏・菅沼氏・石川氏とめまぐるしく交替した。慶長八年(一六〇三)七月、戸田一西は膳所で没し、二代は戸田左門氏鉄(うじかね)、元和元年(一六一六)撰津尼崎に移り、三代目にはじめて本多縫殿助康俊が同じ三万石で三河国西尾より転封して来た。四代は本多下総守俊次、元和七年(一六二二)八月、三河西尾に移り、五代は菅沼織部正定芳が伊勢長島より入城したが、寛永十一年(一六三四)、丹波亀山(現在の京都府亀岡市)に移った。六代は石川主殿頭忠総で、下総国佐倉より入城、この時から膳所藩は七万石になった。七代は石川主殿頭昌勝が継いたが、慶安四年(一六五二)、伊勢亀山に移った。

この後を承けたのが、伊勢亀山より再び入城した本多下総守俊次、以後本多康稷(やすしげ)に至るまで藩主二十代、本多家としては十五代を数えて廃藩に至った。

膳所藩の石高は代々七万石であったが、十代本多隠岐守康慶(やすよし)の代から六万石に減じた。これは延宝七年(一六七九)の相続に当たったことで、康慶は九代兵部少輔本多康将(やすまさ)の兄康長の長男であるが、先に相続したところ、後になって康将に長男が生まれ、この織部忠恒(ただつね)に一万石で分知することが必要となったからである。こうして、本多忠恒は河内西代(にしんだい、現在の大阪府河内長野市)藩主となったが、その長男のちに伊勢神戸藩主となる本多伊予守忠統(ただむね)である。

歴代膳所藩主の名と生存年数は、膳所に墓所がある方に限ったが、第1表に示した。

第1表 近江膳所藩主歴代年数表





第2図 縁心寺の現景

## 2 菩提寺―縁心寺

膳所藩主本多家の菩提寺である縁心寺は、大津市丸之内町にある。もと榮泉寺と称し、初代膳所藩主の戸田采女正一西が、築城直後の慶長七年（二六〇二）に創建した寺で、源蓮社洪誉上人と真隆恕大和尚の開基とされている。この榮泉寺は、膳所城下では唯一の瓦葺の建物で、「膳所の瓦寺」とよばれていたと伝えられている。<sup>(山)</sup>戸田一西と夫人の墓は、現在も縁心寺境内の一角に所在している。

この榮泉寺を縁心寺と改めたのが、元和五年（一六一七）七月に、第三代膳所藩主として三河国西尾（現在の愛知県西尾市）から入封した本多康俊で、西尾の城下に建てられていた縁心寺の本尊と住僧をここに移し、縁心寺と改称したのである。

西尾にあった縁心寺は、康俊が、実父の酒井左衛門尉忠次、法名先求院殿縁心居士のために創建された寺で、縁心寺の名はその法名から付けられた。また膳所縁心寺の山号を「梅香山」とするのは、康俊の法名「梅香院殿英誉輝嚴縁崇大居士」に由来している。もとの境内は三反三畝三步（三万三千平方メートル）であったといい、藩政時代には、米百五十石と十八扶持、さらに寺侍一人が附与され、膳所十箇寺の一に数えられていたが、中でも藩主の菩提所である上において、もっとも格式の高い寺であった。

敷地は東海道に面し、門前には、「舊膳所藩主御菩提寺」「梅香山縁心寺」

と刻んだ石柱が左右に立っている。参道を進むと正面に山門、その右側に番小屋の建物がのこっている。門を入ると、前庭を距てて、寄棟造、棧瓦葺の本堂がある(第2図)。

当寺のことについては、藩儒として仕えた寒川辰清が、享保十三年(一七二八)、十二代藩主康敏の命によって著述にかかり、同十九年(一七三四)に完成した『近江輿地志略』に、次のように記されている。

〔縁心寺〕 梅香山縁心寺と號す。洛東智恩院の末寺也。慶長七壬寅年縁崇公建立し給ふ。源蓮社洪譽法師の開基也。初此寺三河國西尾にあり。元和三年台命に依て縁崇公封を此地に受け給ひ、寺も又こゝに遷る。先求院縁心公とは酒井左衛門尉忠次公の諡也。縁崇公共追福の爲に寺を建つ故に縁心寺と號し給ふ。縁崇公は酒井忠次公の男也、縁崇公歸泉し給ひて後、謚して梅香院殿といひ寺も又梅香山といふ。境内に先君累世の墓及戸田氏の墓あり。戸田氏は今美濃國大垣の城主なり。

### 3 藩主本多家の墓所

縁心寺境内の中央に東面して建つ本堂の裏に、南北に長い墓地がひろがっている。本堂の南側に設けられた木戸をくぐって墓地に入ると、すぐ左側に築地塀で囲まれた一廓があるが、これが戸田一西と夫人の墓所である。

膳所藩主本多家の墓所は、まず本堂のすぐうしろに、右から三代康俊(梅香院殿)、九代康将(了義院殿)、四・八代俊次(専光院殿)、四・八代正室(崇安院殿)の、大きな規模の墓所四基が並んでいる。そこから奥へ向かって右側、その間には姻戚の間柄で家臣となる南・北本多家の墓塔を狭んでいるが、十一代康命(通性院殿)・十二代康敏(天籟院殿)・十四代康政(徳性院殿)の三基が、それぞれ東面して並ぶ。さらに、こんどは墓地の一ばん奥まったところに、右に十五代康伴(通香院殿)・十七代康完(玄諦院殿)の二基が南面している。これらの墓所の配置図は、大阪教育大学考古学研究会のメンバーによる平板測量で作成したが、概略図を掲げておく(第3図)。

縁心寺にある墓所は上記の九代分九基で、歴代膳所藩主のうち、十代の康慶が京都知恩院の塔頭先求院境内に、十三代康桓・十六代康匡・十八代康禎・十九代康融は江戸で亡くなったために、現在の東京都江東区白河一丁目の靈巖寺境内の累代墓所に、二十代康穰は東京都染井墓地にそれぞれ所在している。

ところで、縁心寺の歴代墓所は、現状では随分荒廃している。本堂裏に並ぶ四基は、一辺約四・五メートル、高さ一・八メートルの石柵がめぐ

#### 大名家墓所の一例

#### 大名家墓所の一例

らされ、中央には一辺三、二メートル、高さ四〇センチ前後の石製、方形の基壇が築かれている。もとはこの壇上に霊屋(たまや)が建てられていた。現状では、各壇の中央に高さ五〇センチ前後の花崗岩製の五輪塔がおかれている。各五輪塔地輪の正面には、法名と没年が刻まれている。これらの中で、三代康俊の墓所はもつとも遺存状態が良く、石柵正面の中央には、現状でははずれてしまっているが、もとは本多家の定紋である立葵(たちあおい)文を刻んだ二枚の石扉がはめられていたことがわかる。また、この墓所に限って、門柱の框は唐破風様の石材が用いられ、その上には、これも本多家の紋である「本」の字を雲形の台座にのせた形の石製の飾りがおかれている。さすがに膳所藩主初代にふさわしい、整った構えである(第5・6・7・8図)。

これから左にならぶ三基はいずれも同様のつくりである。四基の墓所とも、石柵の前には、それぞれ二基ずつの石灯籠が建てられている。なお、専光院殿すなわち四・八代俊次の墓所の南西隅には、茶壺形をした別の石塔が添えられている。俊次が敬慕した今井四郎兼平の墓である。後につづく通性院殿・天籟院殿・徳性院殿の三基と、奥の通香院殿・玄諦院殿の二基は、共に本来はそれぞれ一つの石柵で囲まれていたのであるが、すべてはずされてしまっており、昔日の面影はない。先の四基にくらべるとずっと貧粗な造りで、先の三基分の石柵は、復原してみると、南北十七・九メートル、東西四メートル、柵の高さは七〇センチである。また、後の二基分は、東西六・九四メートル、南北三・八メートル、柵の高さは六三センチをはかる規模である。各基壇も、一辺が一・八〇メートルの方形、高さは三二・四〇センチといった小規模なものになっている。これらの五基にも、現状ではほぼ同じ大きさの五輪塔が中央に据えられている。各墓所の計測値は第2表に示した。

初期の四基の立派さに比べると、江戸時代中期から後期にかけての藩主の墓所に見られる粗末さは、藩経済そのものの反映とも見られ、現世における藩の現実、藩主の奥津城にまで敏感に影響を及ぼしたことが、墓所の規模・構造から窺い知ることができる。

先に述べたように、これら各墓所の基壇上には霊屋が設けられていた。大正初年(くわしい年月は不明)、墓所の維持が困難であるということもあって、霊屋の建物は、旧城下の寺院に下賜された。霊屋を取り去ってしまうと、基壇と石柵しかのこらず、それでは供養の対象がなくなってしまうということもあって、現在見られるように、基壇上におかれている石造五輪塔が、この直後に同じ規格をもって一斉に造られたと考えられる。

縁心寺には、五棟分の霊屋の建物が、もとの状態であった時の写真がのこされている(第12図)。これを見ると、それぞれ方一間の本瓦葺の建



第2表 近江膳所藩主歴代墓所＜滋賀県大津市丸の内町、縁心寺所在＞計測表

番号	法名	(代) 俗名	石垣外周			基壇			整塔			霊屋
			正面	側面	高さ	正面	側面	高さ	基礎正面	基礎側面	高さ	
1	正眼院殿	(初代)戸田 <sup>かずあき</sup> 一西	3.97	3.95	156.0	2.13	2.14	0.25	0.85	0.86	152.0	
2	梅香院殿	(3代)本多康俊	3.49	4.33	172.0	2.28	2.30	0.28	0.48	0.49	112.0	
3	専光院殿	( <sup>4代</sup> <sup>8代</sup> )本多俊次	4.32	4.29	176.0	2.13	2.20	0.40	0.52	0.52	121.0	
4	崇安院殿	( <sup>4・8代</sup> 正室) やや	4.35	4.25	179.0	2.17	2.15	0.42	0.52	0.52	118.0	
5	了義院殿	(9代)本多 <sup>やすまさ</sup> 康将	4.31	3.95	177.0	2.15	2.18	0.37	0.49	0.47	125.0	
6	通性院殿	(11代)本多 <sup>やすのぶ</sup> 康命				1.87	1.91	0.35	0.49	0.49	126.0	
7	天籟院殿	(12代)本多 <sup>やすかず</sup> 康敏	117.9	4.03	(0.70)	1.87	1.92	0.35	0.47	0.47	130.0	
8	徳性院殿	(14代)本多康政				1.88	1.93	0.35	0.48	0.48	128.0	
9	通香院殿	(15代)本多 <sup>やすとし</sup> 康伴				1.88	1.90	0.32	0.49	0.49	125.0	
10	玄諦院殿	(17代)本多 <sup>やすきだ</sup> 康完	6.94	3.88	(0.63)	1.93	1.92	0.40	0.48	0.48	126.0	縁心寺境内地藏堂 正面 1.75×側面 1.76

単位 m

昭和59年9月30日調査

## 大名家墓所の一例

物であったことがわかる。屋根のつくりは寄棟造と入母屋造の二種があり、霊廟建築というほどの豪華な造りではないが、写真で見ると限りでは、やはり整った形の墓所であったとすることができるであろう。

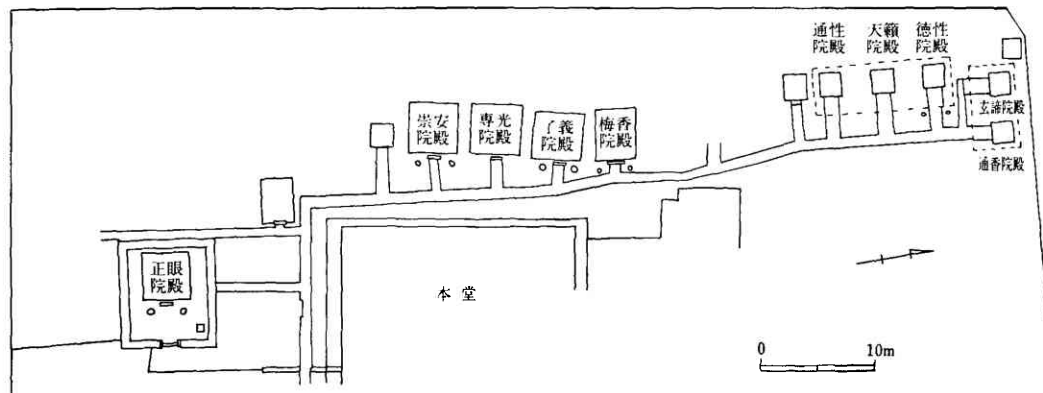
膳所城下の寺院を歴訪して調べてみたところ、西ノ庄の法傳寺に一棟(第15図)、膳所一丁目の安昌寺に二棟(第14図)、縁心寺境内に地藏堂となっている建物(第13図)の計四棟が現存していることがわかった。これらのうち、安昌寺に移されている霊屋だけが内部が改造されておらず、その造り方から判断して、霊屋の内部には位牌がまつられていたのではないかと推察している。あと五棟分の霊屋の所在は現在のところ不明であるが、引き続き探索したいと思っている。

方形基壇上に霊屋が設けられ、まわりを石柵で囲んだそれぞれの墓所が完全にのこっていたら、それなりに整った形となり、六万石の格式を持つ膳所藩主にふさわしいすがたであったに相違ない。

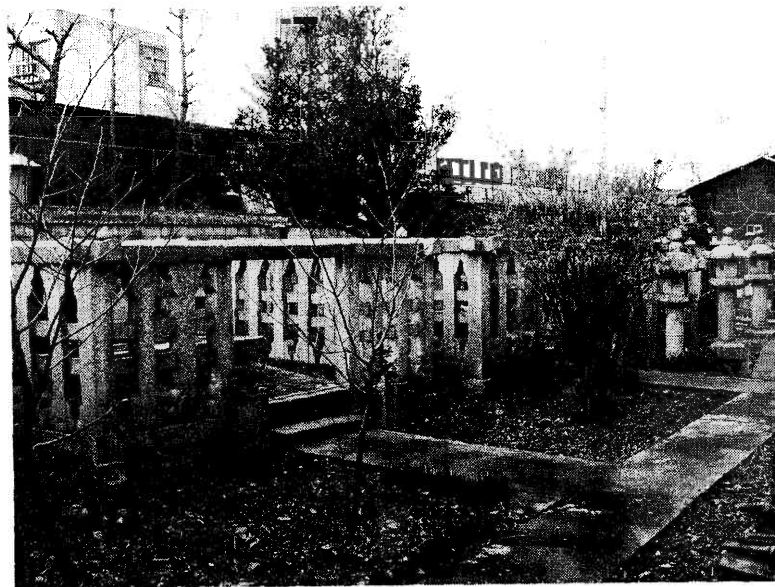
藩主の遺骸は、おそらく木製の棺におさめられ、地下につくられてた墓室に安置されているのであろう。霊屋を伴うものとしての構造は、改葬に伴って発掘調査の行なわれた、備前岡山藩主池田忠雄墓所<sup>(3)</sup>、あるいは東京都港区の済海寺に所在した、越後長岡藩主牧野家墓所の例が参考になるであろう。<sup>(4)</sup>こうした構造・形式が、江戸時代大名墓所に通有の一つの類型であったことが推察できる。

## 注

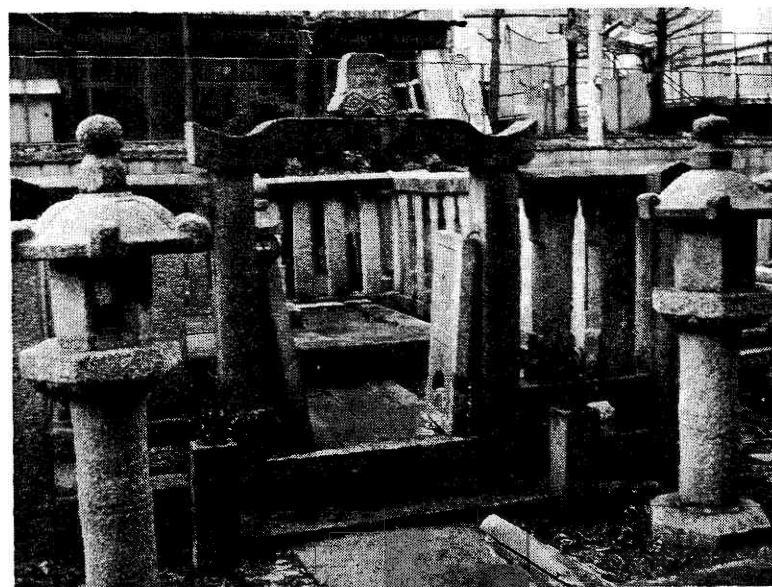
- (1) 竹内将人氏『膳所六万石史』(立葵会、昭和五八年八月)
- (2) 霊巖寺は、江戸時代のはじめに霊岸雄蒼上人が砂洲を埋め立てて霊巖島を造成した際に建立された寺である。明暦の大火で焼失後、深川の現在地に移転した。境内墓地の北東隅に、伊勢神戸藩初代藩主、本多忠統侯の墓塔と並んで、その左側に「舊膳所藩主本多家之墓」と刻んだ墓塔が建っているが、昭和八年の建立である。地下墓室に納められていた歴代の遺骨は多摩霊園に改葬されたと仄聞している。
- (3) 藤井 駿・鎌木義昌『池田忠雄墓所調査報告書』(岡山市教育委員会、昭和三九年)、および「中世・近世の埋葬」(近藤義郎編『岡山県の考古学』所収、昭和六二年)
- (4) 鈴木公雄ほか『港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査概報』(東京都港区教育委員会、昭和五九年)、および同『港区三田済海寺長岡藩主牧野家墓所発掘調査報告書』(東京都港区教育委員会、昭和六〇年)



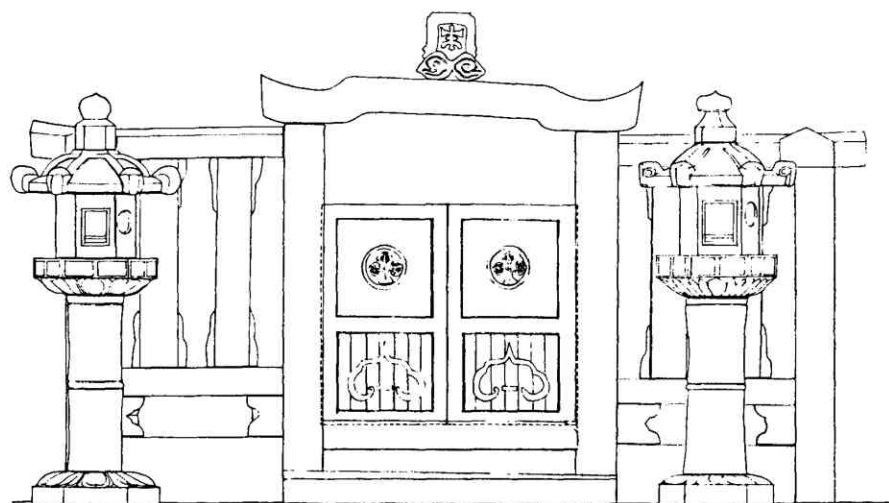
第3図 近江膳所藩主戸田家・本多家墓所平面図（大津市丸の内町，縁心寺所在）



第4図 縁心寺本多家墓所全景



第5図 梅香院殿墓所現景（その1）

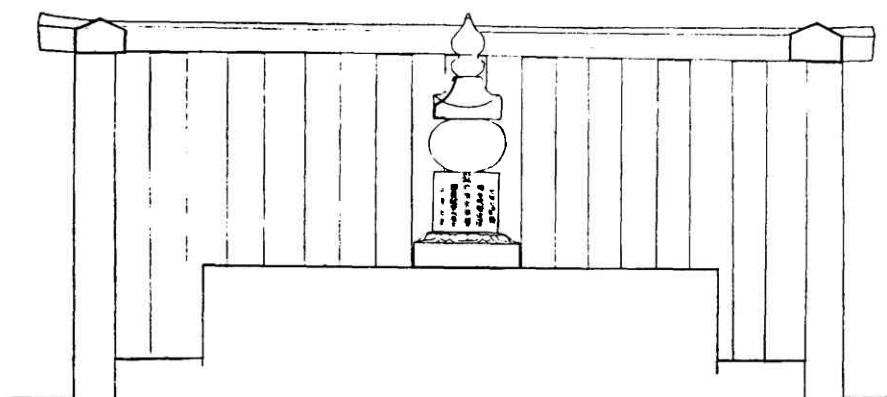


正面立面図 (1/40)

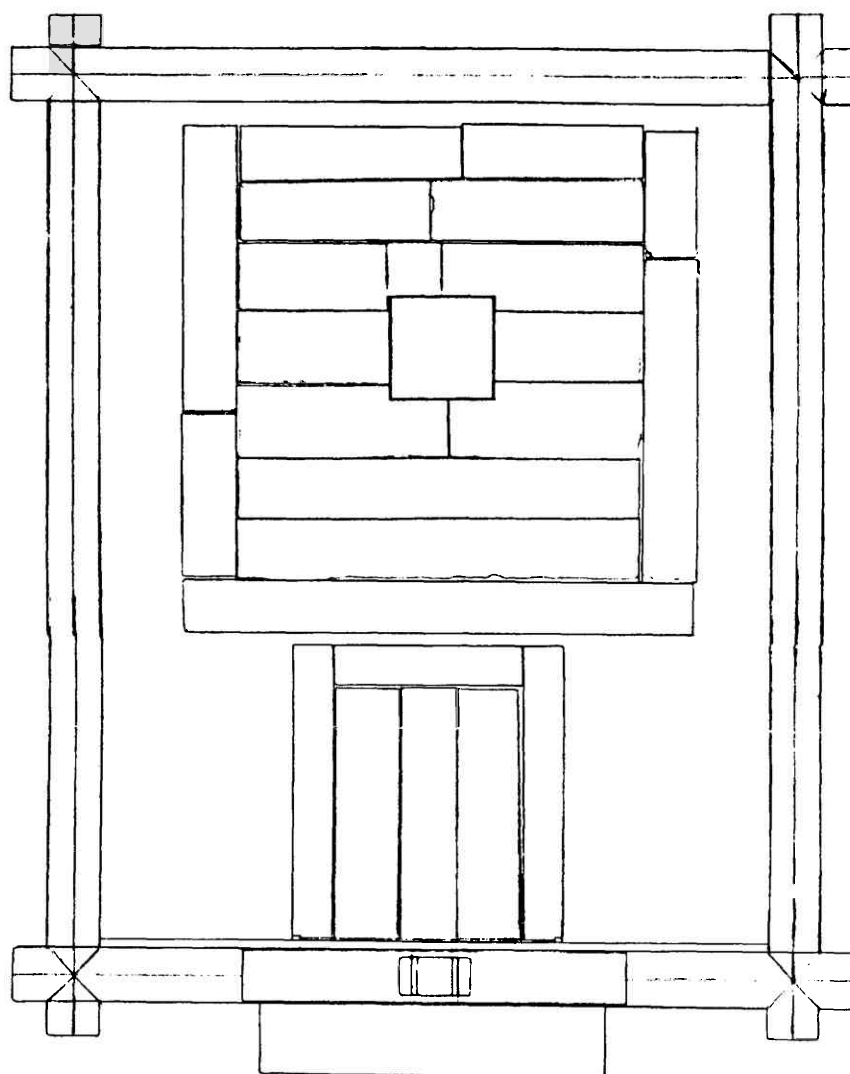
膳所藩主本多康俊（梅香院殿英誉輝巖縁崇大居士）墓所実測図



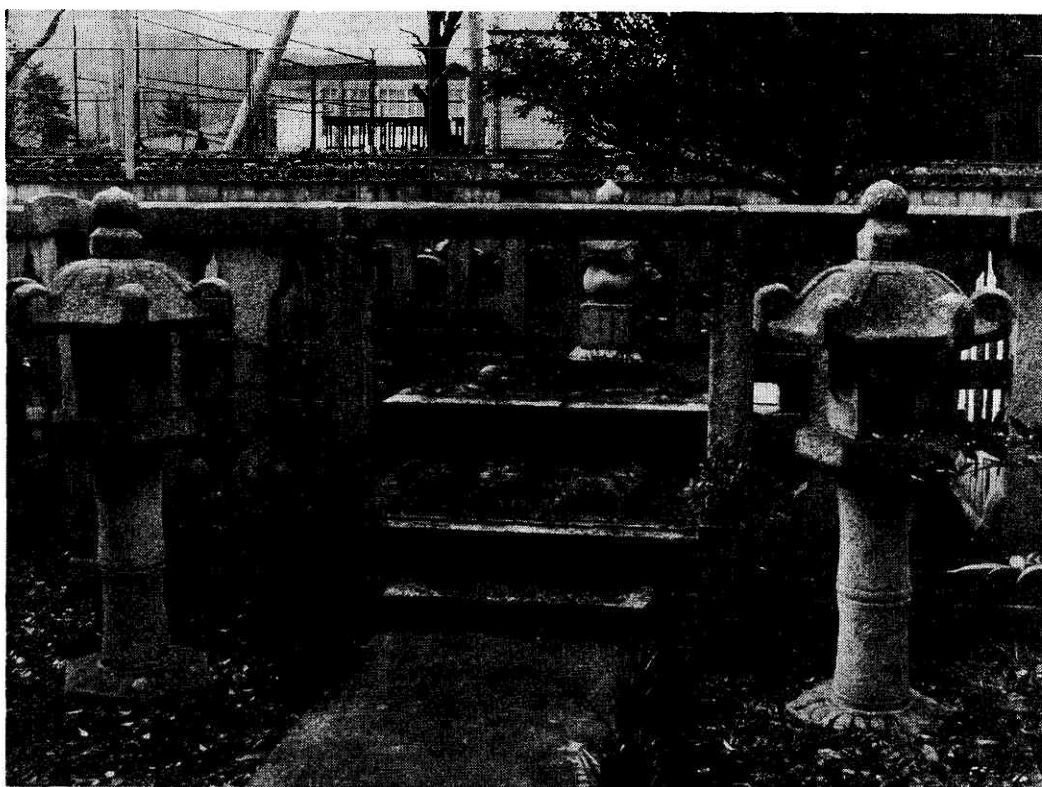
第6図 梅香院殿墓所現景（その2）



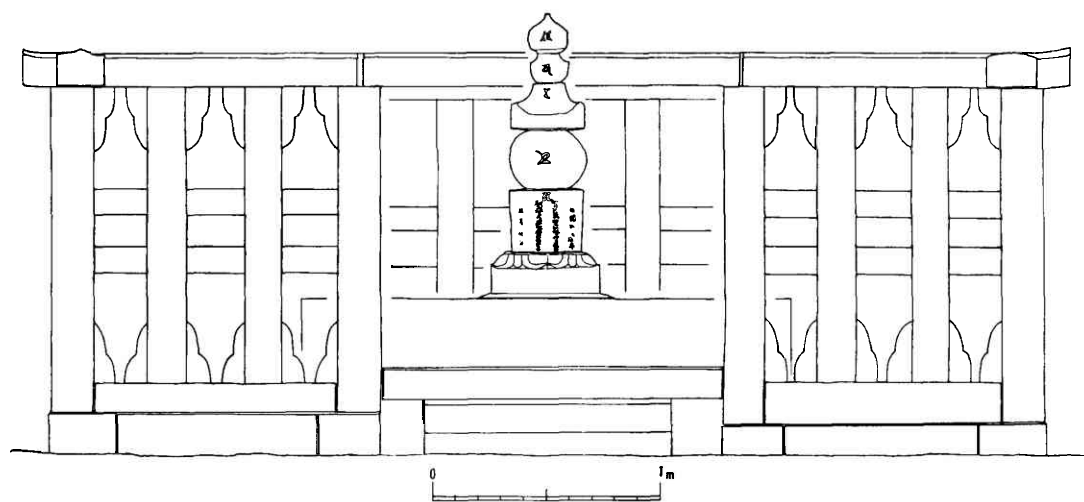
墓塔 (1/40)



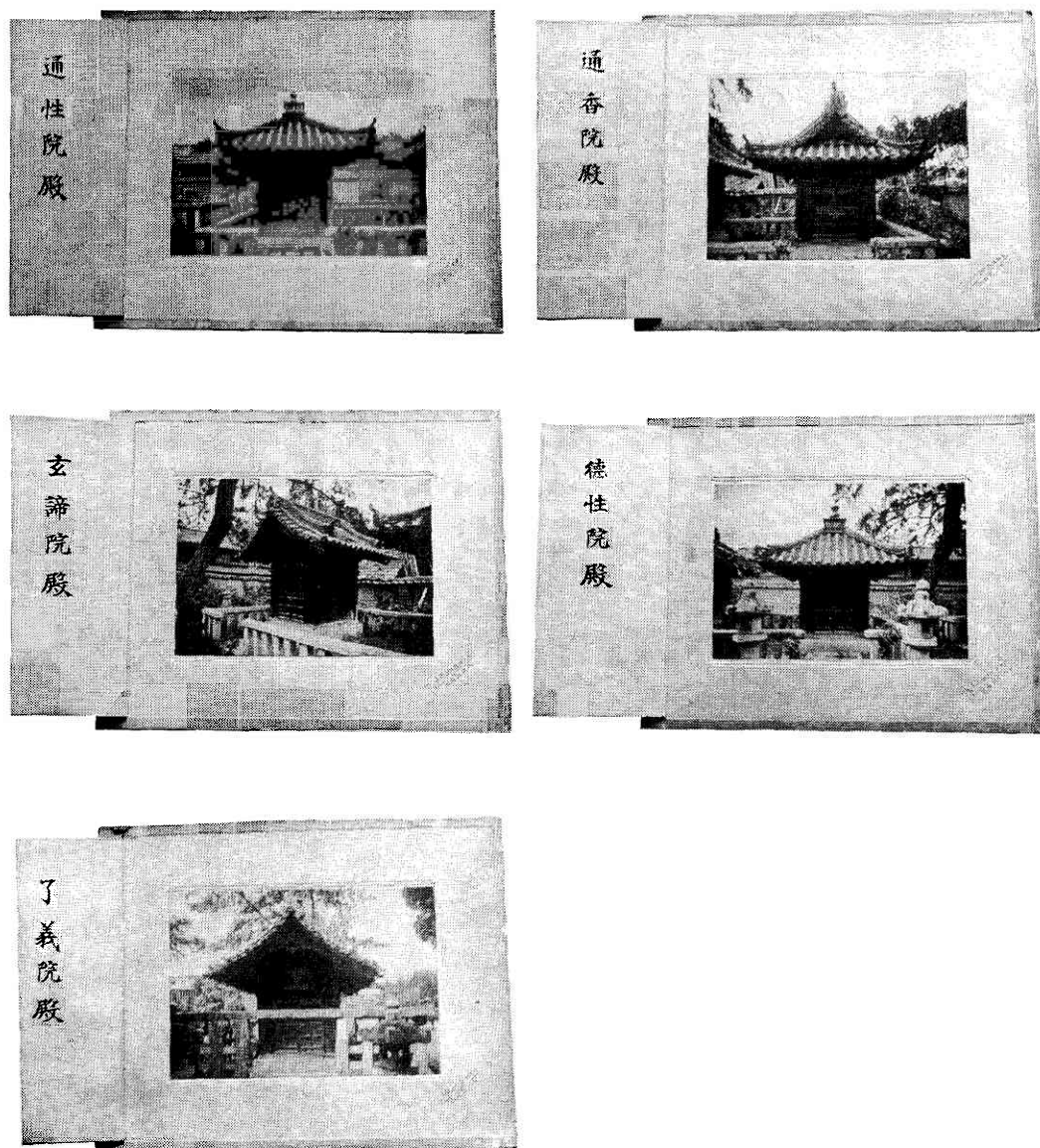
平面図 (1/40)



第10図 了義院殿墓所現景



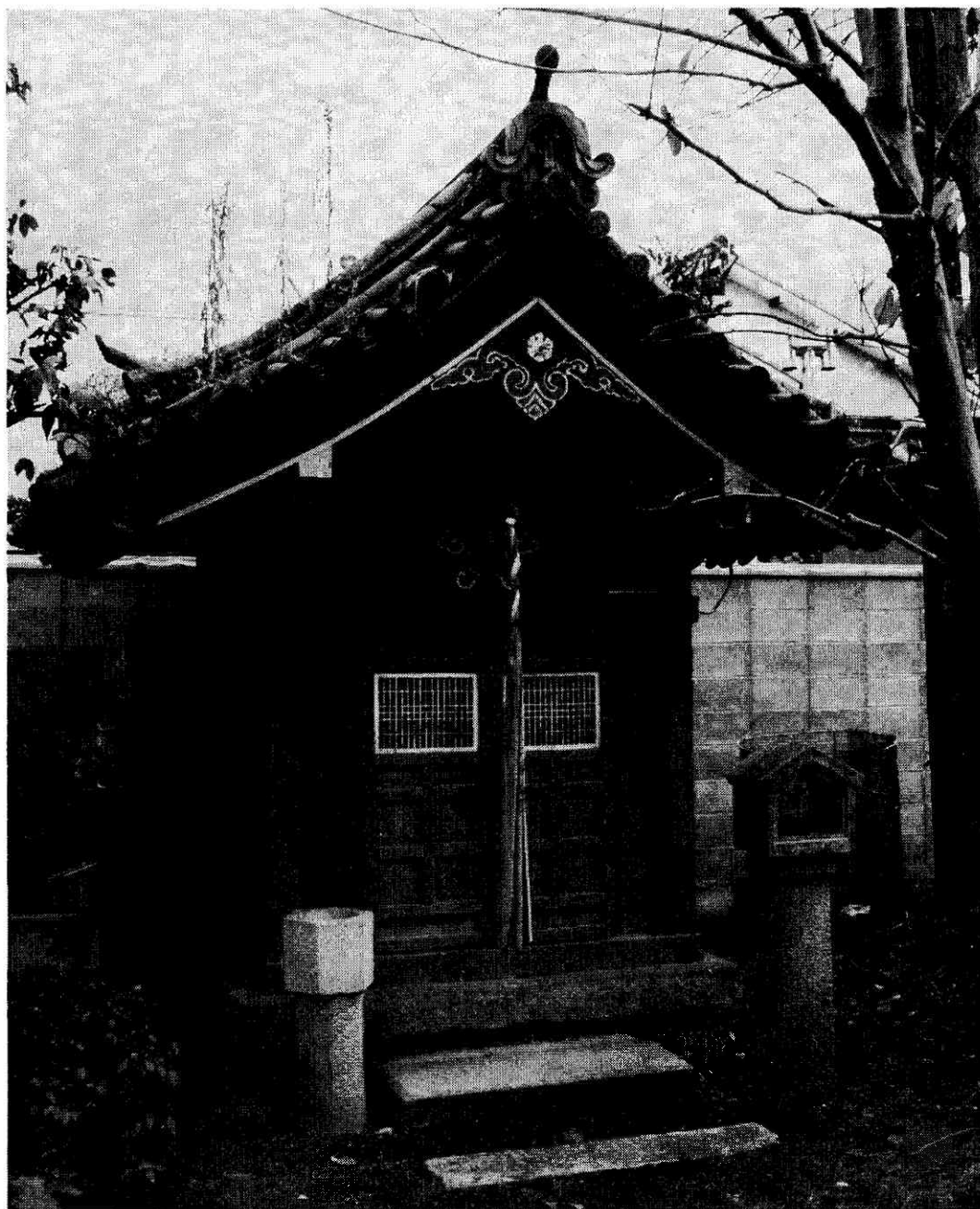
第11図 了義院殿墓所立面図



第12図 膳所藩主墓所の霊屋（旧状）

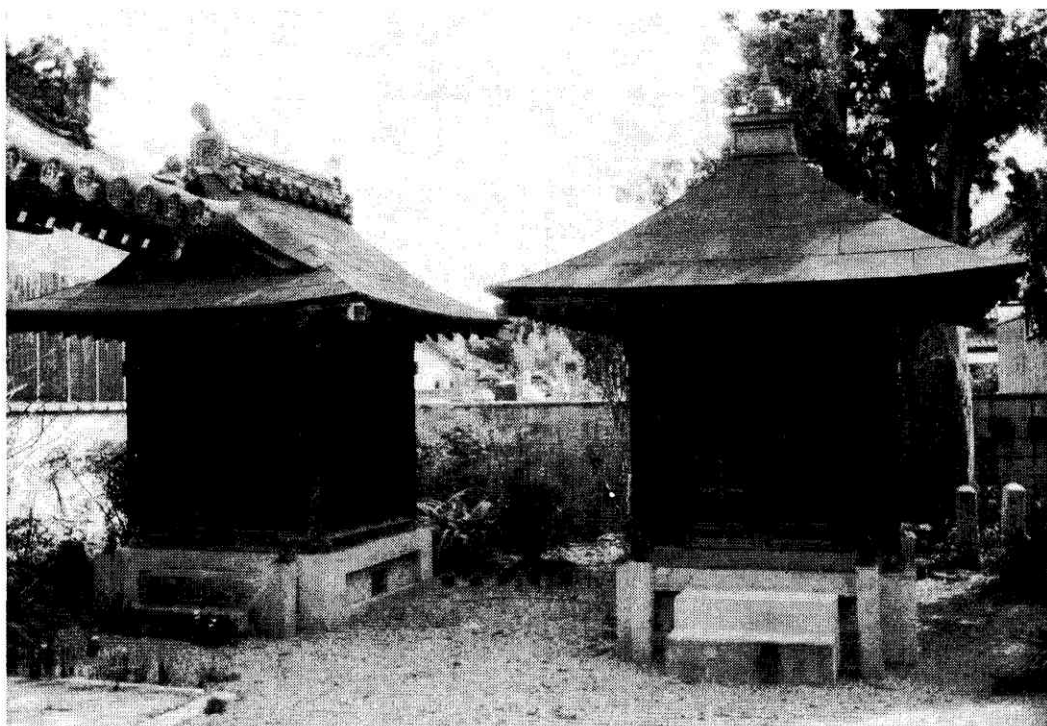
名 称	構 造	現 所 在 地
通性院殿墓所霊屋	宝形造	西ノ庄，法傳寺境内
通香院殿墓所霊屋	入母屋造	膳所1丁目，安昌寺境内
玄諦院殿墓所霊屋	切妻造	不 明
徳性院殿墓所霊屋	宝形造	膳所1丁目，安昌寺境内
了義院殿墓所霊屋	切妻造	丸ノ内町，縁心寺境内





第13図 了義院殿墓所の霊屋（縁心寺境内所在）





第14図 安昌寺に移された霊屋



第15図 法傳寺に移された霊屋

## 大名家墓所の一例

### 三「お松見」本多家墓所

#### 1 本多家の出自と三河国伊奈

近世を通じて、譜代の幕臣として大きな勢力を持ち、江戸時代には大名一三家、旗本四五家に広がった本多家は、本姓は藤原氏、中世末から尾張・三河の地方に住した大族である。徳川四天王に数えられる本多忠勝の系統が宗家とされているが、伊勢神戸藩とその本家である近江膳所藩の本多家は「伊奈本多」といわれ、三河国伊奈の地（現在の愛知県宝飯郡小坂井町）を本拠地として発展した。

この間の事情を、まず手近かなところにある史料として、『寛政重修諸家譜』に見ることとする。

藤原氏 兼通流

本多

寛永系図に、先祖は堀川の関白兼通の流なり。累代山城国愛宕郡賀茂郷に住す。忠次より五六代以前三河国にきたり、宝飯郡伊奈郷に居す。しかれども家譜散佚して詳なること知らずといひて、助太夫忠俊より系をおこす。今の呈譜、兼通より代々忠俊、忠次にいたるまで、系図連綿す。これを本多中務大輔忠願が家系に合せ考ふるに、兼通より以下右馬允定助この家の系譜・修に至るまで粗相同じ。忠願が家系は、定助が男を平八郎助時といふ。此家の系図には、定助が男を隼人正時初名八郎泰次といふ。これより系統相分れり。定助がときより、東三河宝飯郡伊奈郷をうちとりて城郭を構へ、のち代々居住す。正時文明年中より明応のころにいたるまで、泰親君、信光君、親忠君に御味方して所々のたたかひに功あり。其男を修理正助初名八郎後号永昭といふ。正助が男、縫殿助正忠初名八郎清康君をよび東照宮に仕へたてまつり、岡崎浜松にをいて歳首及び御謠初の時着座す。忠俊はその男なりといふ。

忠俊

助大夫今の呈譜、彦太郎後助大夫又隼人佐にあらたむといふ。

三河国宝飯郡伊奈を領す。……（中略）……七年（永禄）三月四日伊奈にをいて死す、法名寿徳。

忠次

彦八郎今の呈譜に、彦八郎のち隼人佐また縫殿助にあらたむといふ。母は某氏

……（中略）……慶長十七年死す。年六十五。今の呈譜、慶長十八年四月六日三河国西尾にをいて死す。年六十六。法名松見。西尾の郊原に葬る。妻は菅沼織部正定村が女。

「光好」

修理亮今の呈譜に、はじめ八郎のち修理光忠に作る。……(下略)……

康俊

九十郎隼人彦八郎縫殿助従五位下実は酒井左衛門督忠次が二男。母は清康君の御息女。

永禄十二年吉田に生る、天正三年長篠合戦のとき、東照宮の仰により織田家の質となりて岐阜の城にいたる。七歳にのち三河国にかへり、八年忠次が養子となり……(中略)……十年御前において元服し、御諱の字をたまはり、康俊とめさる。十七年家を継。

(注、文中の傍線は筆者による)

『本多家譜』によると、藤原氏の流れを汲む名族であるが、藤原鎌足から数えて十一世に当たるのが兼通、十二世の光秀は山城賀茂社の神職であったが、故あって豊後国本田郷(現在の大分県日田市域とされているが未確認)に配流され、以後ここに住した。その子助秀の代から本田(後、本多と改める)の姓を名乗った。その子助定は、足利尊氏に従って功あり、三河国横根付近の村(現在の愛知県大府市)を賞与してもらった。これが、一ど九州にあった本多氏が東上する機縁となった。

それから三代の裔が定忠であり、伊奈の地に住し、「伊奈本多」を称するようになる。そして、『寛政重修諸家譜』に記されている記事につながる。

なお、この「伊奈本多」については、昭和五十一年に刊行された、地元の『小坂井町誌』第三章中世、室町安土桃山時代に「伊奈の本多氏」として、地元のにこされている史料や伝承も合わせて紹介し、くわしい考察が加えられている。

## 2 小坂井町の史跡

小坂井町は、北と東が豊川市、南は豊川放水路を距てて、東三河の中心である豊橋市と、西は御津町にそれぞれ境を接している(第16図)。豊川・佐奈川・白川など大小の河川が貫流する田園地帯で、篠束(しのづか)遺跡をはじめ、多くの縄文・弥生時代の遺跡が分布している。また、町の中心に近いところにある菟足(うたり)神社は、式内社で、祭神の菟上足尼命(うなみすくねのみこと)は、葛城襲津彦命四世の孫で、雄

大名家墓所の一例



0 1000m

第16図 小坂井町域と本多家関係史跡

①伊奈城跡 ②花ヶ池 ③東漸寺 ④舞々辻 ⑤御松見

略天皇の御代に穂の国の国造に任じられたと伝えられている。これらの遺跡や古社などが所在していることから、三河湾に面した肥沃な平野のひろがる現在の小坂井町の所在する地域が、古くから開発の進んだ豊かな土地であったことがわかる。

中世の末、この地に本拠の地を構えた本多家関係の史跡としては、地名としてのこるのが、丸ノ内・市場・大門・縫殿・柳堤・御城山・御松見・花ヶ池・糟塚等で、わずかながらも昔日の面影を伝えているのが、本多家の墓所「御松見」、さらに本多家の開創であり、菩提寺であった東漸寺がある。

**伊奈城跡** 町の西端、佐奈川の提防に近いところにある。現在では、わずかに土塁の一部だけがのこり、その上に大正二年（一九一三）造立の

石碑が建てられている。碑は正面に、

伊奈城址

従二位子爵 本多康稷書

と大書され、背面には、

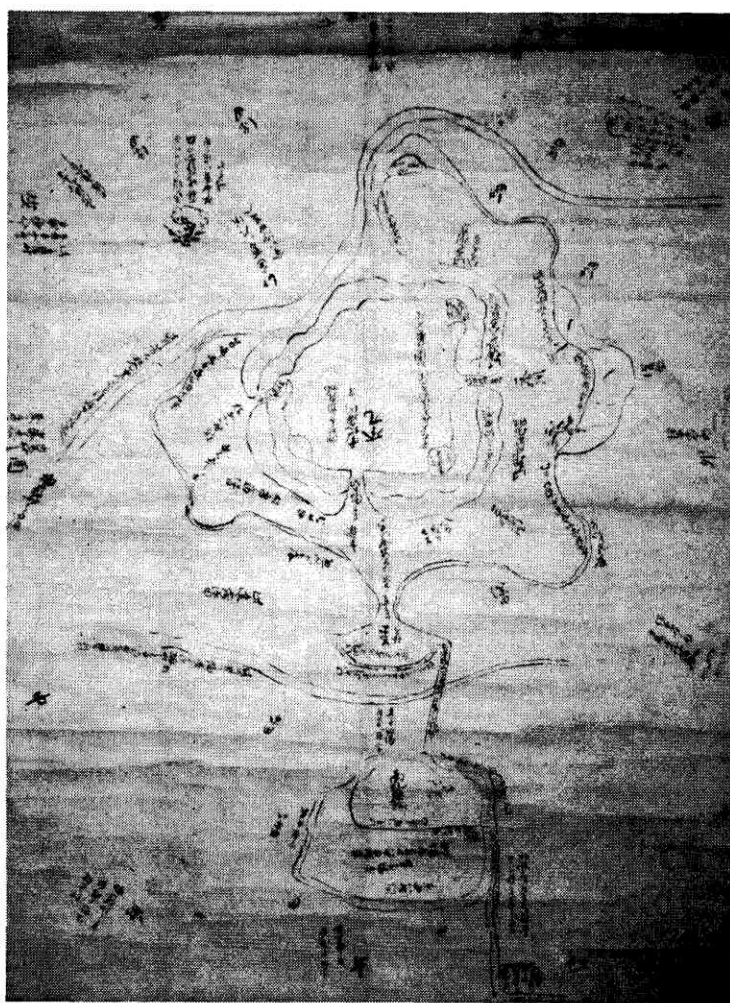
維歲大正癸丑丁龍瑞公三百五十年忌辰有

縁士民等胥謀樹石以表蹟云

旧藩士 平田好謹書

の文字が刻まれている。

まわりは耕地整理の行なわれた見事な水田になっていて、城館のおもかげは知るすべもないが、幸いに東漸寺には伊奈城の古図が伝えられていて、おおよその構造を知ることができる（第17図）。ただしこの図の描かれた年代は明記されていないため不明であるが、中に記されている文言で見ると、廃城後何年かを経た時点での図であ



第17図 伊奈城の古図（東漸寺所蔵）

第3表 〈お松見〉本多家墓所・墓塔一覧表

番 号	法 名	(代) 俗 名	石 垣 外 周		基 礎		蓮 台		墓 碑		備 考				
			正面	奥行	高さ	正面	奥行	高さ	正面	奥行		高さ			
1	清徳院殿	本多 忠俊妻	201	201	124.5	66.2	60.8	21.3	54	43.6	17.5	39.5	20.5	106	
2	龍端院殿	本多 忠俊	206	199	123	66.5	60.5	21	53	44.5	18	39.5	24	111	
3	恵光院殿 曜蓮院殿	本多 光忠 本多 光忠妻	170.6	171.3	91.4	55.5	48.9	24.5	45.8	38	15	34.2	18.9	88.6	
4	寂照院殿	本多 忠次	206.1	197.6	127.1	67.5 55.2	60.7 45.6	21.1 17.3	54.3	46.4	16.6	39.6	21.7	110	

単位 cm

単位 cm

本多家墓所 小坂井町には、本多家の墓所と伝えられるところが二カ所ある。その一つは「舞々辻(まいまいのつじ)」で、現在、町立前山公民館の建っているところである。四周に土塁をめぐらし、中央に小高い塚があり、大正のはじめごろまでは松林になっていたというのである。いつのころか開墾によって消滅したが、その時にいくつかの五輪塔が出土し、東漸寺の墓地に移されているそうであるが未調査である。もう一カ所が、先年調査した「お松見」(御松見とも書く)とよばれている墓所で、伊奈城跡から南へ約五〇〇㍎距てたところに所在している。先に記した伊奈城古図を見ると、図の一ばん下に近いところに方形の区画があり、「松見様御座敷」「御隠居」と記されている。「松見様」とは、「寂照院殿超誉炭信松見大居士」の法名が贈られた本多彦八郎忠次のことで、生前から「松見」と号されていたという説もある。古図に記されているように、この場所に隠居屋敷があり、後世になってそれが墓所になったのかも知れない。現在、ここを「お松見」とよぶことも、こうしたことに由来しているのである。

#### 大名家墓所の一例

るように思われる。他に史料のない現在としては貴重である。

第4表 「お松見」本多家墓所歴代表

番号	法 名	俗 名	没 年	備 考
一	清徳院殿容心智聞大姉	本多忠俊妻	天文九年（一五四〇）	
二	龍瑞院殿賢峯壽徳大居士	助太夫 本多忠俊	永禄七年（一五六四）	
三	恵光院殿源清空意大居士 曜蓮院殿孤心貞竣大姉	修理亮 本多光忠 同 妻	天正八年（一五八〇） 天正二年（一五七八）	
四	寂照院殿超譽爰信松見大居士	本多忠次	慶長十八年（一六一三）	

大津市膳所の縁心寺には、この「お松見」の図がのこされていることが『小坂井町誌』に記載されている。しかし、私が縁心寺で確かめたところでは、現在見当たらないということであった。

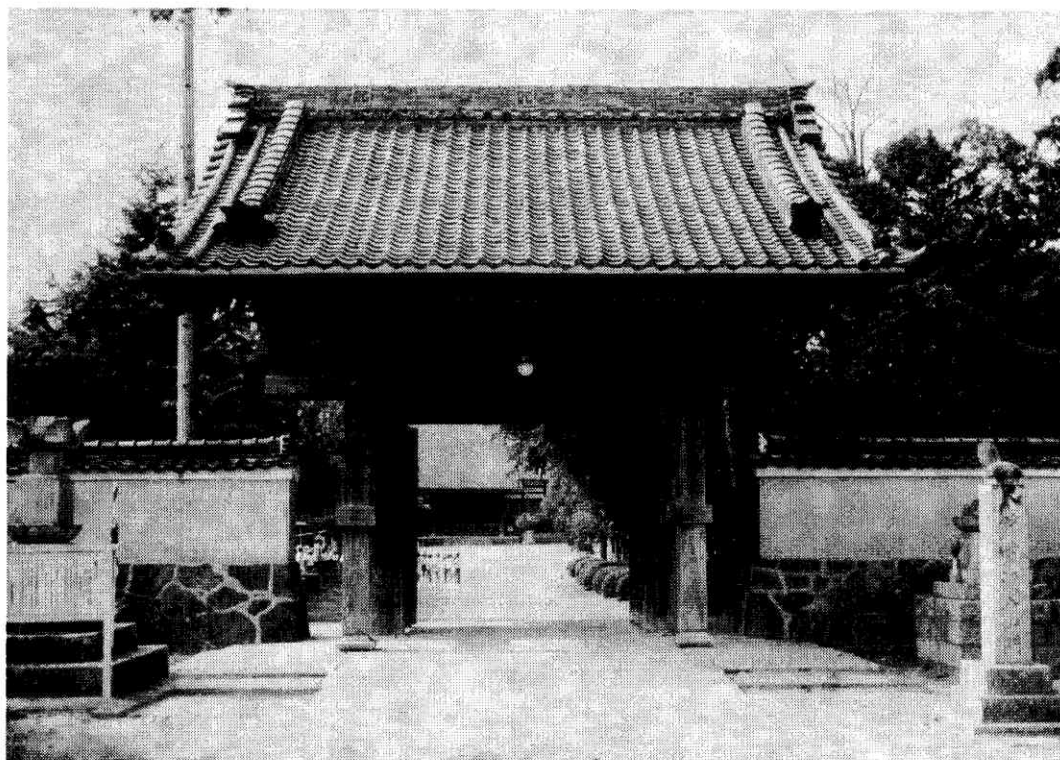
この「お松見」の墓所は、現状では南北約三〇呎、東西約四〇呎の、不整長方形の区画がのこり、周囲には土塁状のわずかな高まりがある（第19図）。縁心寺にあるという図を見ると、北に正門があり、柵をめぐらしていたようである。昭和六〇年九月、大阪教育大学考古学研究会の学生諸君の協力を得て、平板測量により墓所全体の平面図を作成した（第20図）。

図に見られる通り、この敷地の中に四カ所の墓碑が配置されている。墓碑に刻まれている被葬者の没年代の古いものから仮りに番号（一〜四）を付し、各墓碑の実測図を作成した（第25図、現状写真第21〜24図）。また、各墓碑の計測値は第3表の通りである。

このうち、恵光院殿・曜蓮院殿合葬碑（三）を除いて、三〜四段に柱状の石材を積んで基礎をつくり、その上に柵をめぐらし、中央に蓮台を持つ柱状の墓碑の碑身をのせている。それぞれ正面に法号を、両側面に職名・俗名・続柄を刻している。

大名家墓所の一例





第18図 東禅寺山門

この「お松見」墓所に所在する墓碑は、第4表に見られるように、本多忠俊とその妻、本多忠次、それに本多光忠とその妻の計五名で、系譜で見ると二世代である。忠俊は、伊奈本多氏の六代、忠次は七代目に当たり、光忠は忠次の異母弟である。

以上四基の墓碑は、すべてが砂岩でつくられ、三の恵光院殿・曜蓮院殿、すなわち光忠夫妻の墓碑(三)が基礎を持っていないことを別にすると、ほとんど同工同大である。ただし、各人の生存年代は室町時代であるが、考古学の常識では、これらの墓碑の形式は時代の特色とは合わない。従って、江戸時代のある時期に、一斉に墓碑が造立されたものと考えられる。その時期についての確証はないが、一つの画期として考えられるのが、忠俊夫妻と光忠夫妻の碑前に奉献されている石灯籠は、

奉造立

龍瑞院殿 尊前

宝永四年

五月日 本多修理久充

とあることで、ここに見える久充は、光忠から数えて五代の孫に当たる。従って、宝永四年(一七〇七)に先立つころ、といえば本多家は、膳所藩主十代康慶の代であるが、先祖の発祥地であるこの伊奈の地の墓所に、墓碑を建立するようがあったのではないかということが考えられるのである。



**東漸寺** 東海道本線「西小坂井駅」の西方約五〇〇呎のところに、うっそうとした森に囲まれた古刹がある。曹洞宗、萬年山東漸寺、この伊奈の地に本多家が根拠の地を定めた時以来の菩提寺である(第18図)。

『萬年山般若林東漸寺誌』には、本多家と当寺のつながりがくわしく記されているので、ここに引用する。

#### 四、開基本多家と東漸寺

##### 一、伊奈城築城

常山の開基本多家は遠く源を大織冠藤原鎌足十一世の裔關白太政大臣兼通に出で、兼通より十三世を経て助秀に至り其の嫡男助定、右馬允と稱し、延元元年足利氏が西走して大宰府に兵を起すや之に従ひて功勞あり、足利氏は助定に西三の邑を賞與した。二代を経て定忠に至り、時恰も天下亂れ群雄四方に起つて互に覇を競うたから、定忠も名を興さむことを謀り、東三河の地を鎮め伊奈の地に城を築いた。これ伊奈城の始めで本多家の雄飛する基となつた。

##### 二、東漸寺開創

伊奈本多家の祖助定の嫡子正時、八郎とも隼人とも稱し、泰忠と改め、更に泰次と改めたが、徳川氏に屬して戰功多く、明應の始め泰次禪風を慕ひ、東漸寺を開創し亨隱禪師を請して開祖となし先祖累代の菩提寺となした。

##### 三、徳川家御紋章起原

天文元年岡崎城主徳川清康兵三千を率ゐて吉田城を攻め、伊奈城主本多正忠が案内し、牧野氏を亡ぼし、凱旋の際正忠は清康に酒肴を獻じたが、池に生ひし水葵を籍きて肴を盛つた。清康之を視て嘉瑞となし、永く家の定紋となした。これが徳川氏の三葵の紋章の起源である。本多家、東漸寺は立葵を紋章となす。池は通常花ヶ池と謂ひ、城趾の東北水田の傍に存し、往昔は城主の産湯の水を汲みたる池であるといふ。文化十年江州膳所藩主本多家の臣黒田忠明が花ヶ池の石碑を刻し現存する。

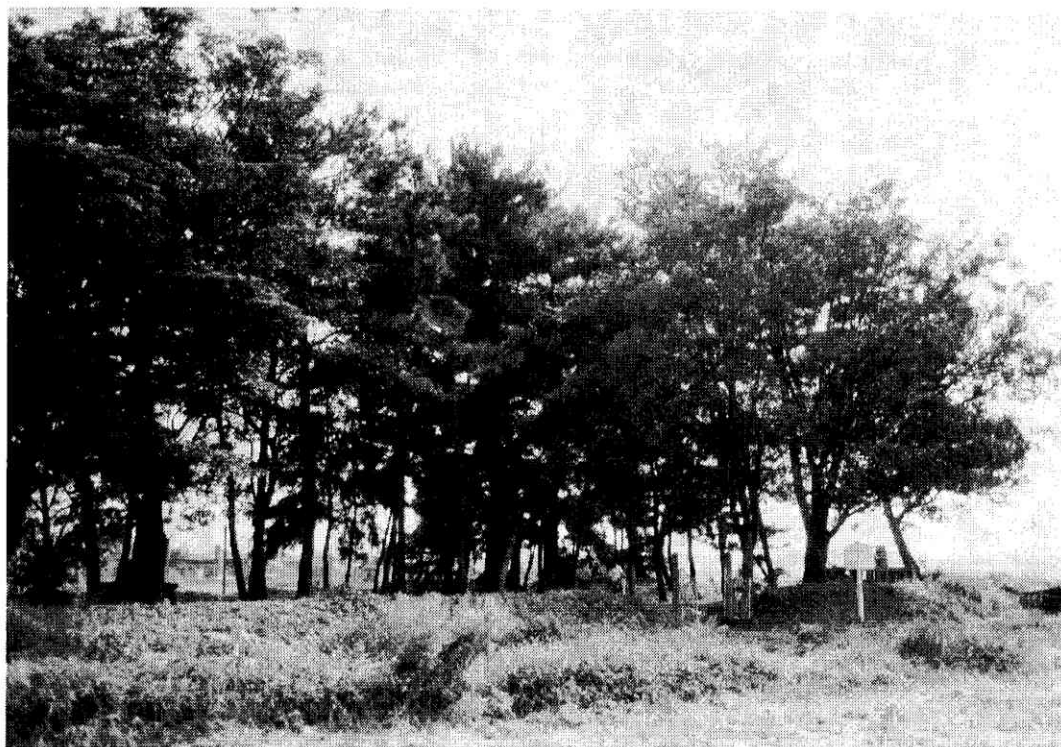
##### 四、本多氏の推移變遷

本多家略譜古記録等を按ずるに、始め山城國に源を發し西して豊後國本多郷に遷り、東して西三河に據り伊奈城に根據を定めた。忠次の養嗣子康俊天正十八年下總小篠郷に移封せられ又、慶長六年二月三河西尾へ、元和三年江州膳所へ移封、嗣子俊次元和七年參州西尾へ所替、寛永十三年勢州龜山へ、正保五年再び江州膳所へ所替、歴代を経て明治二年廢城時の當主は本多康稷、同四年七月十五日東京に於て諸藩版籍奉還と共に華族に列せられ子爵に叙せられた。

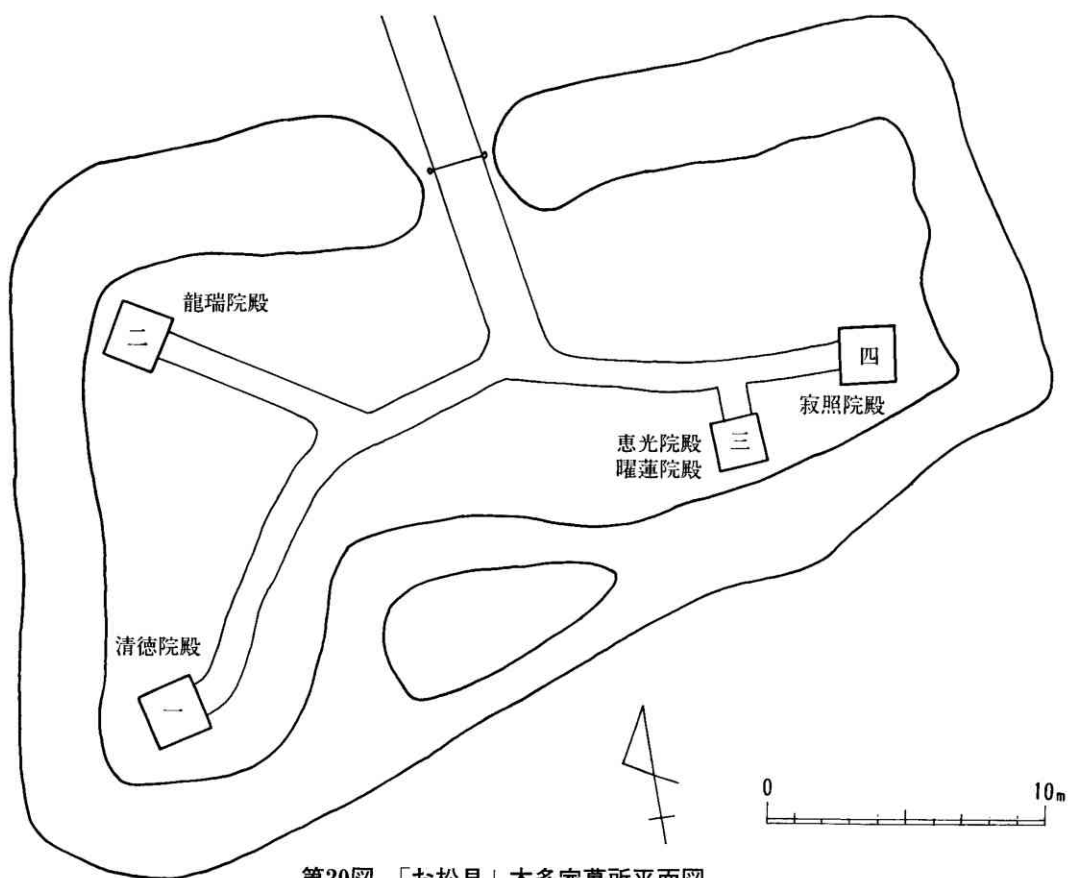
##### 五、献香及び建碑

寛永甲申開山禪師の二百年遠忌を修行するや膳所城主家臣を遣はして開山前に香華を獻じ、松見にある本多家先祖の墳墓を親拜し、墓碑を修繕せしめて香華を供し、以後毎年使臣を遣はして納料し、以て明治に至つた。此間二百有餘年士民恭追の情止み難きものがあつたが、然し、時經るに従つて、伊奈城趾は漸次荒廢し、顧みる者無きほどの運命に立至つた。

##### 大名家墓所の一例

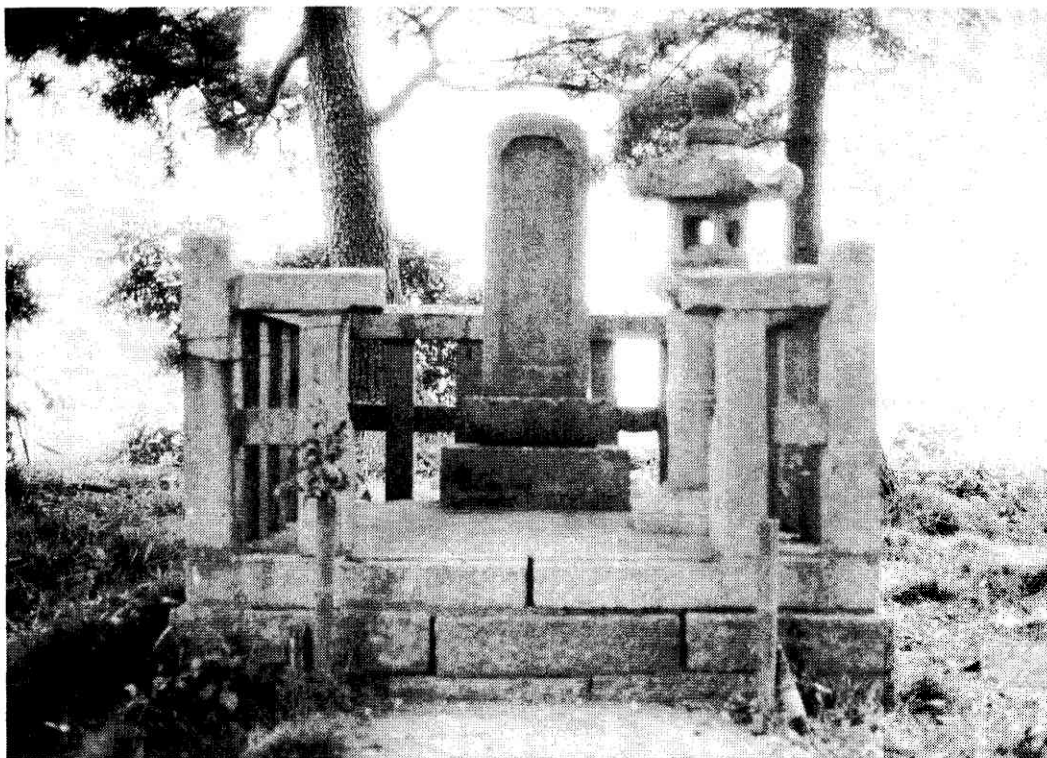


第19図 「お松見」本多家墓所の現景

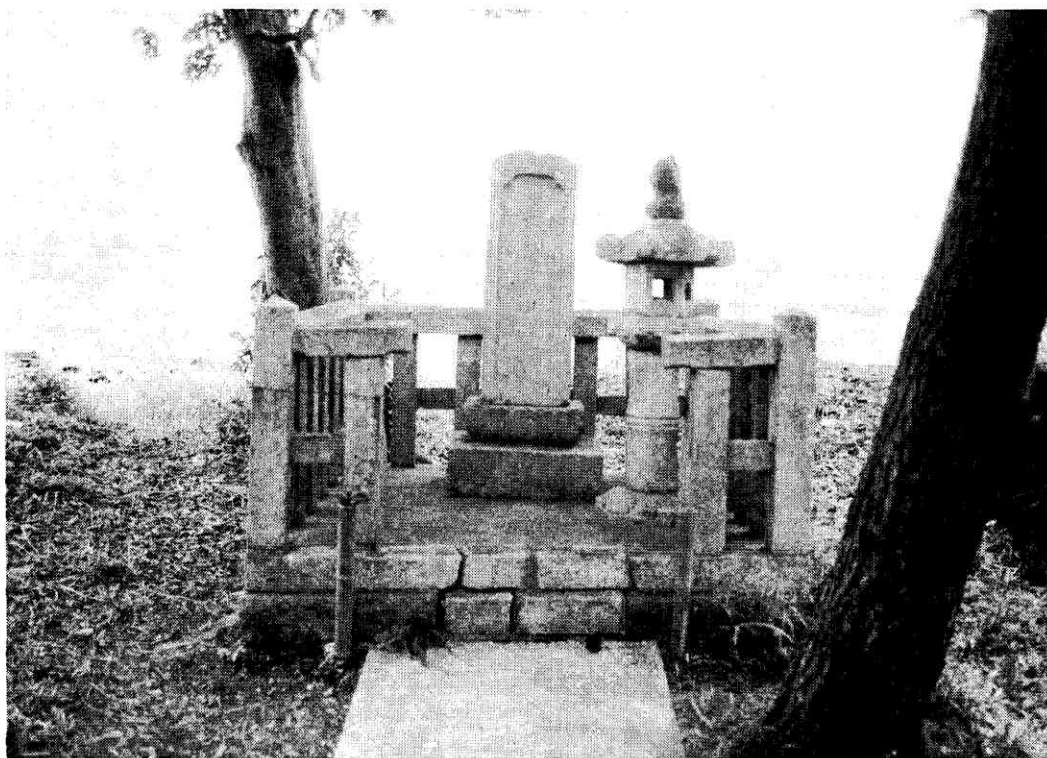


第20図 「お松見」本多家墓所平面図

(愛知県宝飯郡小坂井町伊奈所在，昭和60年9月3日実測)



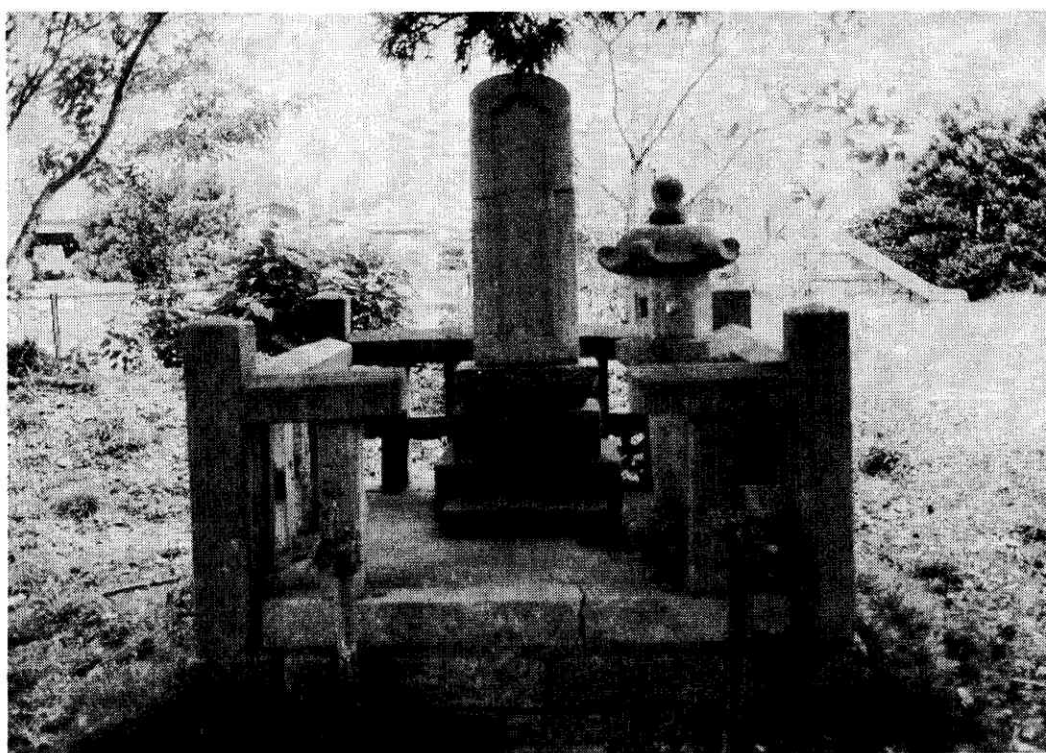
第21図 清徳院殿墓碑



第22図 龍瑞院殿墓碑

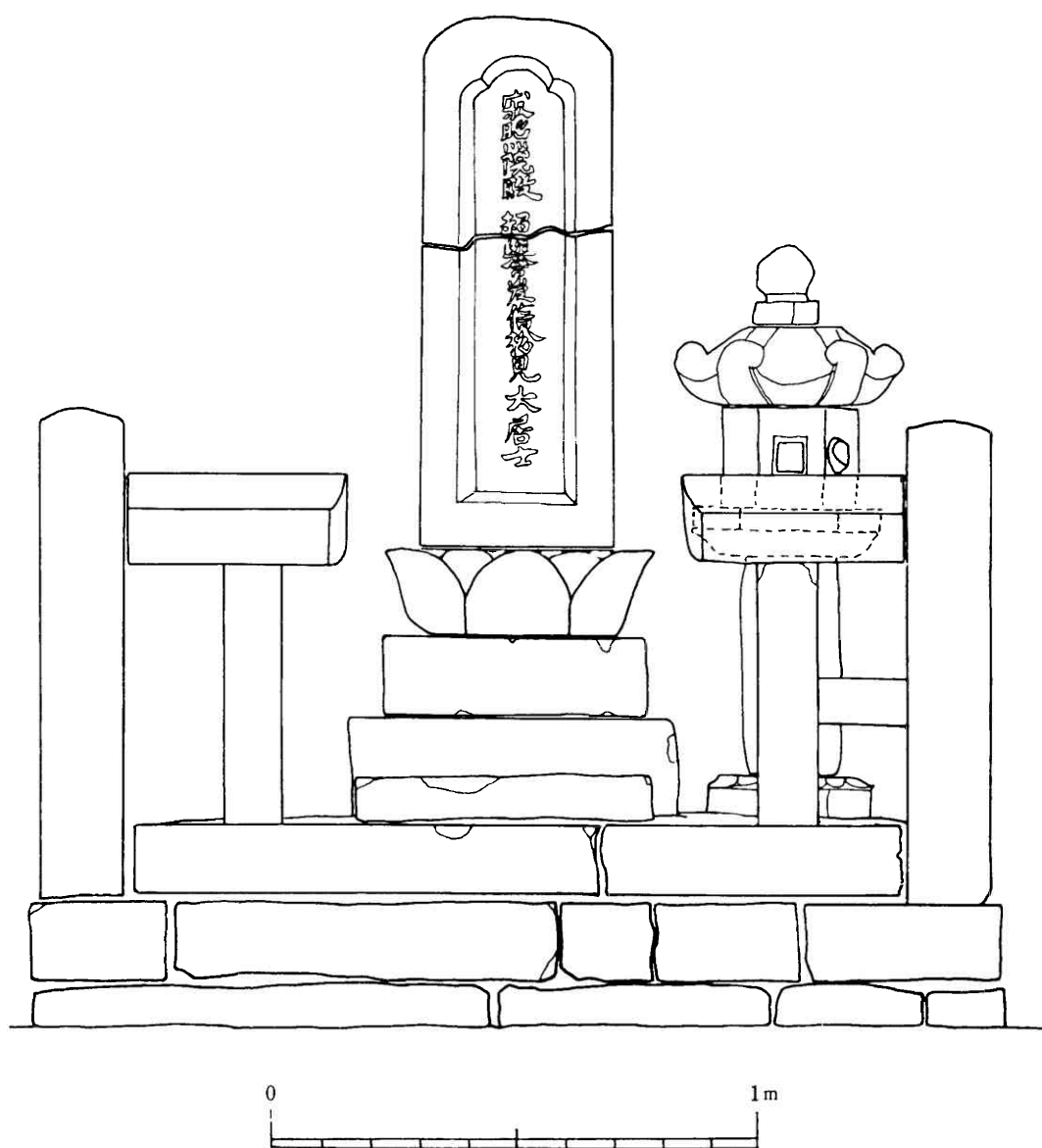


第23図 恵光院殿・曜蓮院殿墓碑



第24図 寂照院殿墓碑

大名家墓所の一例



第25図 寂照院殿墓碑実測図

## 大名家墓所の一例

龍瑞院殿（本多家中興初代忠俊）の三百五十年忌を謹修するに當つて、第三十三世台雲和尚有縁の人々と謀つて城趾保存を企て、舊膳所藩士で大阪に在る平田好氏の篤志に基き大正貳年建碑した。

其の碑文「伊奈城趾」は本多康種子爵のものせるものであつて永久不磨の記念となつた。本多子爵家は康虎、猶一郎、相繼ぎ、東京に居住してゐる。

建碑の式は所在の人々をして、新たに、遠き昔よりの東漸開山禪師の徳風を慕はしめ、又は伊奈城の昔を偲ばしめ、三葵、立葵の起源を知らしめ、本多家の興隆した歴史を明かにする所があつた。

本堂仏壇の向かつて左側には、本多家歴代の位牌がまつられている。

## あとがき

本学の史学研究所では、昭和五十五年の創設以来、伊勢神戸藩主本多家に関する調査・研究が進められて来た。猗蘭（いらん）と号し、文人大名として知られた初代藩主本多忠統（ただむね）を中心とする漢詩文の分野については中田勇次郎教授が、近世大名としての本多全体のことについては若林喜三郎教授が、それぞれ調査・研究を担当され、その成果は本論集の各号に逐次発表されている。

中田・若林両教授による研究が進められて行く段階で、伊勢神戸の地をはじめとして、神戸藩領の所在地、歴代藩主に係わりのある地を歴訪して関係史料の調査が進められて来た。その上に、さらに範囲を拡張、神戸藩本多家の本家に当たる膳所藩の所在地であつた滋賀県大津市、さかのぼって神戸・膳所両藩本多家の発祥の地である三河国伊奈城の故地、現在の愛知県宝飯郡小坂井町に赴くなど、広域にわたって史料の調査がつづけられて来たのである。

私は、本多康彦氏（伊勢神戸藩主本多家の後裔、本学園評議員）とご相談しながら調査・研究のお世話をする役割であつた。そして、それぞれの機会に私の専門分野である考古学の立場から、本多家につながる各地で、遺跡・遺構のほか、さまざまな遺品に接するたびに、資料を記録し、関係することについての研究を私なりにつづけて来た。

本稿に取り上げた大名家の墓所について関心をいだくようになったのも、こうした機縁からで、膳所縁心寺の墓所を拝見した時に、「これを学生たちと一しょに図をつくってみよう」と心に決めたのである。同じように、小坂井町の「お松見」墓所も、三河地方の史跡見学を兼ねて、



学生達と訪問し、これも実測図を作ってみようと思い立った。

こうして、膳所縁心寺の墓所については、昭和五十九年・六十一年の二年度にわたり、考古学実習の受講学生に分担してもらって、各墓所の立面図・平面図を完成した。

この調査に当たっては、自由な調査を許していただいた膳所藩主本多家の後裔に当たる本多猶一郎氏（東京都に在住）、縁心寺住職本多康信氏とご家族には、期間中、本堂を解放していただき、湯茶の提供をいただくなど多大のご厚意を受けた。また、立葵会竹内将人氏より種々ご教示と助言を得た。

小坂井町の調査に当たっては、当初、昭和六十年十月に、史学研究所の諸先生と、両本多家のご当主がはじめて伊奈の地を訪問するというところで、小坂井町伊奈地区挙げての歓待を受けた。私が学生達と改めて当地を訪問し、「お松見」墓所を調査したのは昭和六十年七月と九月であるが、これらの機会を合わせて、とくに小坂井町町会議員今泉五郎、伊奈区長中西欣次、東漸寺住職永井康允、小坂井町教育委員会前教育長栗木茂一以下の各氏に一方ならぬお世話になった。

両墓所の平面図の作成は、本文中に記したように、大阪教育大学考古学研究会所属の出原真哉・仲谷和恭・浜田幸司・明元知子・近藤聡子の諸君の手に成る。また、考古学実習とはいいながらも、遠隔の地にまで出かけて炎天下で蚊にかまれながら、慣れない作業に従事してくれた史学科十七期・十八期生の受講諸君の汗と努力の結晶であることを銘記しておきたい。

本稿では、膳所城下の縁心寺に所在する膳所藩主本多家墓所と、三河国伊奈の地にある先祖の墓所について、調査報告をかねて紹介した。当初は、そのあとに、すでに各地で見聞している大名家墓所を資料として、二三の問題を提起し、考察を加えてみるつもりであったが、図版に多くの頁を費したこともあり、これについては他日を期すことにしたいと思う。

本稿をまとめるに当たっては、毎回の本多家関係史料の調査に当たって世話役をしてもらっている史学科研究室の額田由美子さん、調査と資料整理にアシスタントとして活躍してもらった、十七期生の和田佳子さん、十八期生松田公見子さんの助力を得たことを附記して、一まず本稿の筆をおくこととしたい。